

広島・東京・広島

－丸山さんとの月日－

東京大学大学総合教育研究センター教授

小林 雅之

丸山さんに初めて会ったのは、1980年頃に箱根で開催された第2回「3大学合宿」の時だった。3大学合宿は、東大、名大、阪大の3大学の教育社会学の教員と大学院生の合宿で、私は初めて参加した。丸山さんについては、アメリカ帰りで、それをことさら誇示するわけでもなく飄々とした態度で、淡々とチャーター理論を紹介していたことが記憶に残っている。

その後、私が1983年に広島修道大学に赴任した時、広島大学大学教育研究センター（広島大学高等教育研究開発センターの旧名称）で助手をされていた。当時のセンターは、日本の国立大学では唯一のセンターであり、まさしく「中心」(center)として喜多村先生が中心となって、国際交流や研究員集会など活発に展開されていた。私は、矢野真和先生の研究会に参加させていただいた。たいへん厳しい研究会で、1回に1頁の時も20頁の時もあった。眼光紙背に徹するということを、実体験させていただいた。当時はメンバーのほとんどが車通勤だったので、研究会終了後に、ファミリーレストランで食事をして、おかわり自由のコーヒーを何杯も飲んで、終電を気にせず、遅くまで話したものだ。丸山さんは、その中でソフトな語り口で、バッファーのような役割を果たしていたように思う。

矢野さんが東京に移り、研究会は、新任の金子元久さんに引き継がれた。金子さんの研究会は矢野さんとは異なるアメリカ流の厳しさで、ここでも、おおいに鍛えてもらうことになった。丸山さんは、変わらずソフトな語り口で、時には一捻りした視点でコメントされていた。

その後、丸山さんは椋山女学園大学に移り、私も1993年に放送大学に、半年後に金子さんが東大に移った。その後、矢野、金子、私の三人は、市川、天野先生のおられる国立学校財務センターの客員教員となった。そこへ丸山さんが専任として赴任してこられ、再び一緒に仕事することになった。当時丸山さんは、数少ない、私学の研究者として着実に成果を挙げられていたが、今度は国立大学の方に、ウイングを広げていかれた。その時の高等教育の問題点を的確につかみとりながら、皆が気がつかないような点に目をつけられて、ひと仕事するスタイルは、私立大学対象の時と変わらなかった。しかし、財務センターは、こうした全国あるいは国際研究の数少ない大学の財務研究のセンターであり、事実上廃止されたのは、大変遺憾である。

丸山さんは、その後、広島に戻り、広島大学高等教育研究開発センターを日本のみならず国際的な高等教育のセンターにと国際共同拠点を目指して奮闘されている。広島大学のためだけではなく、日本の高等教育の発展のため、成就することを念願している。